

ガーフィンケルによる「意図的な誤読」の方法

Garfinkel's Method of "Deliberately Misreading"

秋谷 直矩*

AKIYA Naonori

【要旨】 本論文の目的は、ガーフィンケルによるゲールヴィッチ『意識の領野』の「意図的な誤読」の方法を明らかにすることである。ゲールヴィッチのゲシュタルト心理学に基づく議論を社会学における秩序問題に応用することで、ガーフィンケルはエスノメソドロジのアイデアを創造した。その方法は、ゲールヴィッチの議論において批判された当時の心理学や現象学における知覚の二段階仮説に関する議論をその焦点と射程からは外れたやり方で、パーソンズ的な形式的分析の考え方を捉え直すために利用することである。この方法は、エスノメソドロジの基本的な考え方を示すものであると同時に、研究を実際に行うための具体的なやり方のひとつを創造するものでもあった。

【キーワード】 ガーフィンケル, ゲールヴィッチ, 意図的な誤読, エスノメソドロジ

1. はじめに

エスノメソドロジの創設者であるハロルド・ガーフィンケルの主著の前書きに、タルコット・パーソンズ、アルフレッド・シュッツ、アーロン・ゲールヴィッチ、そしてエトムント・フッサールにその起源があることが明記されている (Garfinkel 1967, ix)。しかし、同著にはこの箇所以外にゲールヴィッチに関する記述はなく、長らくその影響関係は詳らかではなかった¹。

90年代に入ってから、本人によるゲールヴィッチからの影響についての言及を含む論考がいくつか刊行された。特に2002年に刊行された『エスノメソドロジのプログラム』(Garfinkel 2002)では「アーロン・ゲールヴィッチとのチュートリアル・ミーティングは1946年にはじまった。学位論文とそれに続くエスノメソドロジ研究は、対象 (object) の一貫性の記述と分析に関する現象学的な指導を受けたことに端を発しているこれらは、実践的客観性や実践的観察可能性に向けられたものであった。それは、ゲールヴィッチの『意識の領野』の第2部「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」の意図的な誤読によって進められた」(Garfinkel 2002, 257-8)と明言された。そして、ゲールヴィッチとモーリス・メルロ＝ポンティをエスノメソドロジのスローガンとして「意図的に誤読すること (deliberately misreading)」(Garfinkel 2002, 177)が勧められている。しかしそれは「簡潔かつ圧縮されたもので、詳細な説明、あるいは背景の説明はなかった」(Eisenmann and Lynch 2021, 4)のである。

* 山口大学国際総合科学部 akiya@yamaguchi-u.ac.jp

¹ 現在は、アン・ロールズの主導によってニューベリーポートに設置されたガーフィンケル・アーカイブの活動により未公開資料の分析が進んでいる。本論で参照した Garfinkel (2021, 2022) はその成果のひとつである。

そうした状況において、80～90年代に開講されたガーフィンケルの大学院ゼミの録音記録が公開された（Garfinkel 2021, 2022）。これらのゼミ記録において、ガーフィンケルはグールヴィッチからの影響について詳細に説明している。この新規資料を契機として、エスノメソドロジーの創造におけるグールヴィッチからの影響が明らかにされつつある（Eisenmann and Lynch 2021; Hutchinson 2022; Meyer 2022; Lynch 1993=2012; Lynch and Eisenmann 2022）。

しかし、これらの先行研究において、「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」を「意図的に誤読」して読むという実践が、パーソンズをはじめとした「世界的な社会科学運動」（Garfinkel 2002, 94）とは異なる社会学を創造するための、またその寄寓としてのエスノメソドロジーを確立するための手続きでもあったことは注目されていない。この論点が等閑視されている理由のひとつは、先行研究では「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」の「意図的な誤読」の具体的な手続きが当該テキストに即した形で十分に検討されていないことにある。

そこで本論では、グーガーフィンケルによる「意図的に誤読すること」という指示のもとでのグールヴィッチの「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」の読み方を明らかにする。それによりエスノメソドロジーの綱領を示すとともに、「世界的な社会科学運動」とエスノメソドロジーの創造との関係を明らかにする。

2. グールヴィッチの議論の骨子

2-1. 「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」の押さえておくべきポイント

本論の目的を達成するために、グールヴィッチの「ゲシュタルト理論のいくつかの原理」の議論の骨子をまとめる。以下ではグールヴィッチの議論の運びに沿って整理するが、いささかわかりにくいと思われるので、先に図式的にその論旨を示しておく。

グールヴィッチの論敵は、受動的な感覚的データ（＝顕著性）に対する能動的な知的探索（＝選択的注意）によってその形式が与えられるという見立て——本論ではこれを便宜的に「知覚の二段階仮説」と呼ぶ——のもとで知覚について論じた当時の要素主義的な心理学者や哲学者である。この見立てのもとでは、受動的な感覚データはカオスであり、秩序は能動的な知的探索によって与えられることになる。しかし、ゲシュタルト心理学における知覚的体制化の知見を踏まえるならば、受動的な感覚データはカオスではなく、それ自体秩序立っているということになる。

グールヴィッチはゲシュタルト心理学より導かれた知覚理論を現象学的還元とみなし、そのもとで現象学における知覚の議論の再構築を試みるわけだが、本論にとってこの点は重要ではない。さしあたり、上記のポイントのみを押さえてもらえれば、本論の目的は達成される。

2-2. 知覚の二段階仮説に対する批判

まず、グールヴィッチは議論の焦点を「対象 (object)」に定めていることに注目する。これは、「言説・思考、理解の対象となりうるあらゆるもの」（Gurwitsch 1964[2010], 152, ff1）で、「…ここでは厳密に記述的な意味で理解されている。対象は現実にあるものを意味しておらず、むしろ対照的に、与えられた意識する行為を通して経験する主体に現れる、または与えられるもの」（Gurwitsch 1964[2010], 3-4）である。

このように、グールヴィッチは検討対象を「知覚」に焦点化したうえで、ジェイムズの議論を手がかりに問うべき問題を特定する。グールヴィッチはウィリアム・ジェイムズの「意識の具体的な状態」の議論から「ひとつの成分が焦点を保持し、それ以外のものは余白にある」(Gurwitsch 1964[2010], 19) という含意を引き出している。そこから、知覚の問題を、無秩序でカオスな感覚的総体から識別された部分が抽出される条件を問うことだと措定した。

その際、ジェイムズに由来する「選択的注意 (selective attention)」と「顕著性 (salience)」の概念についての議論を参照している。どちらも「経験という具体的な連続した流れのなかから、一部を切り取り、区切り、選び出す能力」(Gurwitsch 1964[2010], 27) によるもので、体制化されていない混然一体とした感覚データから特定の感覚データないし感覚データ群を分離するという点は共通している。このような「分離 (segregation)」を基本現象として考える態度はゲシュタルト心理学においても共通しており、その点を踏まえて、「私たちはゲシュタルトの理論的見解を支持し、場からの単位の分離を、体制が意識的生活の自生的特徴として現れる基本現象として考える」(Gurwitsch 1964[2010], 39) とグールヴィッチは述べている。ここで「体制 (organization)」と呼ばれているものは、「データの閉じた群あるいは領域の分離であり、それ自体で一貫して統合していて、残りの場から切り離されたもの」(Gurwitsch 1964[2010], 50) であると定式化されている。ただし、グールヴィッチは「分離」についてのジェイムズの見解をそのまま支持しているわけではない。続いてこの点について説明する。

「選択的注意」は「私たちが生涯に渡って区別と弁別の訓練をしてきた」(Gurwitsch 1964[2010], 25) 経験、すなわち学習によって後天的に可能になる部分の知覚のことを指す。「選択的注意」は、イメージや知識を有していることを前提としていることから、未知のものや混然としたものの知覚を説明することができないことが問題点である。

「顕著性」は、この問題を解決可能にする概念である。それは、「乱雑で混乱した知覚に代わって、他から分離されたデータないしデータ群を知覚する」(Gurwitsch 1964[2010], 32) 感覚与件的なものである。人間のあらゆる感覚器官は、環境から受けるありとあらゆる刺激、すなわち無差別な感覚的総体から、何らかの徴を選択する。まずこれがあるからこそ、人間は「選択的注意」によって、「単調な音のストロークの連続にリズムを与え、分散した点を列、髄形、星座に群化することができる。経験のなかにいかなる体制が見られるにせよ、それは『感覚の原初的なカオス』に働きかける心によって与えられたもの」(Gurwitsch 1964[2010], 26) なのである。

「重要な点は、すべての伝統的な理論によれば、知覚は単なる感覚から展開すると主張されていること——つまり、その感覚を解釈し、それに意味を与える（種類や内容は問わない）超越的要素が存在するとされてきたということである」(Gurwitsch 1964[2010], 86) と述べていることが示すように、こうした知覚の二段階仮説について、グールヴィッチはジェイムズだけでなく、フッサール、グラーツ学派、ピアジェらに共通する見立てであることを強調する。

以上のグールヴィッチの解釈に基づく知覚の二段階仮説を採用した人びとの議論は、グールヴィッチによれば次のような問題がある。従来の理論における知覚の二段階仮説は「恒常性仮説」の採用と密接に繋がっているが、ゲシュタルト心理学の知見に依って立つならば、その前提は自明でも検証可能でもない、ということである。

知覚の二段階仮説とは、「伝統的な意味での感覚と高次の感覚的事実」(Gurwitsch 1964[2010], 85)を前提として知覚について探究することである。「伝統的な意味での感覚」とは、外的刺激と要素的な感覚与件が恒常的な因果関係として一対一対応する原子的な感覚要素のことである。感覚データは物理的刺激によって与えられるものであって、主体の側から能動的に働きかけるものではない。「高次の感覚的事実」とは、原子的な感覚要素を体制化する能動的な知的探索を指す。先のジェイムズの議論に当てはめれば、「顕著性」は「伝統的な意味での感覚」、「選択的注意」は「高次の感覚的事実」となる。このような知覚の二段階仮説に基づいた議論においては、ゲシュタルトは「高次の感覚的事実」において発生するということになる。

しかし、ゲシュタルト心理学者は、ゲシュタルトの発生を「高次の感覚的事実」に見出すのは自明でも検証可能でもない恒常性仮説であるとして批判する。ゲシュタルト心理学者の代表格の一人であるヴォルフガング・ケーラー(1929=1934, 139-140)は、感覚所与的にゲシュタルトが発生することを次のような例によって説明する。たとえば、紙や鉛筆の名前や用途について知らない場合、それらは視野のなかで分離した単位として存在しないのか、とケーラーは問う。紙や鉛筆を知らずとも、体制化された個別的全体、すなわちゲシュタルトとしてわれわれは知覚しているはずだ。つまり、意味が入り込む前の対象をゲシュタルトとして知覚できるのであるならば、そこにはすでに秩序があるのだ、と。

以上の点から鑑みれば、感覚的総体はカオスではなくそれ自体秩序立っており、それゆえ、場からの分離による体制は人びとが解釈し意味付与する知的探索によってのみなされるものではない。このことから、知覚の二段階仮説は成立しない。

2-3. 体制化の自生的特徴と機能的意義



図 2つの点 (Gurwitsch 1964[2010], 103)

このゲシュタルト心理学による知覚の二段階仮説の棄却を踏まえて、グールヴィッチが重視するのは「あるデータ群が出現し、流れから分離するような顕著性は、流れに導入されるのではなく、流れそのものがもたらす特徴である」(Gurwitsch 1964[2010], 29) ことと、そして「場からの単位の分離を、体制化が意識生活の自生的特徴 (autochthonous feature) として現れる基本的現象と考える」(Gurwitsch 1964[2010], 39) ということである。もうひとつグールヴィッチが強調したのは、知覚された感覚データはゲシュタルトだということである。このことについて彼はいくつかの分析事例を示しているが、ここではもっともシンプルな2つの点の知覚事例を挙げる。

まっさらな背景に比較的近接した2つの点が現れたとする(上図参照)。このとき私たちは、点の真横にもうひとつの点を見ることができる。この2つの点は近接していることから、1つのグループを成しているようにも見える。グループとして見たとき、私たちはいくつかの特徴的な知覚経験を持つ。まず、片方の点の右側または左側としてそれぞれの点を見る。2つの点の間

隔を閉じたものとして見ていると同時に、終点の外側には無限の広がりを見る。このような知覚経験は、2つの点の関係のもとで可能になるものであり、個々の点に還元することはできない。

以上の知覚経験から、グールヴィッチは次のような知見を導いている。すなわち、(1) 分離されたデータはそれ自体がゲシュタルトを成していること、(2) ゲシュタルトはそれを構成する各要素が相互依存的に取り結ぶ機能的意義 (functional significance) を与えること、そして (3) 各要素間の相互依存的な機能的意義は、全体的なゲシュタルトの体制化に貢献しているということである。彼のこの主張は、ゲシュタルトと各要素間の機能的意義は相互反映的な関係にあるということと同義である。ここに、ゲシュタルトの一貫性が生み出されることとなる。

3 ガーフィンケルによる「意図的な誤読」の実践

3-1. 「意図的な誤読」の基本方針 (1): 「知覚」の問題から「社会秩序」の問題へ

こうしたグールヴィッチの議論をガーフィンケルはどのように読み、エスノメソドロロジーの源泉として利用したのだろうか。ガーフィンケルは、グールヴィッチの「意図的な誤読」について、『エスノメソドロロジーのプログラム』では、「エスノメソドロロジーは、社会学の組織的なもの (organizational things) の協調的に達成された一貫性を提供するために、グールヴィッチの対象の一貫性 (coherence of objects) に関する理論を意図的に誤読している」(Garfinkel 2002, 177※太字下線部は原著ではイタリック体表記) と要約的に述べている²。ここでは「対象 (objects)」が「もの (things)」に置き換えられていることにまず注目すべきである。この置き換えは、ガーフィンケルの「意図的な誤読」の基本方針を示すものとして理解できる。

エミール・デュルケムは『社会学的方法の基準』において、「第一の、そしてもっとも基本的な基準、それは、社会的事実をもののように考察することである」(Durkheim 1895=1978, 71) と述べた。ガーフィンケルは自身が「もの (things)」と記述するものがデュルケムに由来することを明言している (Garfinkel 2002, 67)。しかしそれは、ガーフィンケル (1967, p. vii) によって次のように変奏されている。

社会的事実の客観的リアリティは社会学の基本原則であると教えるデュルケムのかの見解とは対照的に、日常生活の協調的活動の継続的な達成としての社会的事実の客観的リアリティは、その達成のためのまったく普通で巧妙な方法が成員によって知られ、用いられ、当然のこととされているということが、社会学をする成員にとって基本的な現象である。このことが代わりに採用され、研究のポリシーとして用いられる教訓なのである。

1967 年のこの言明は 2002 年『エスノメソドロロジーのプログラム』でも堅持されている。その態度は、デュルケム的な「もの」、すなわち個人の行為・思考・感情などに対して外在し、それを一定の向きに拘束するもの——たとえば、法、習慣、宗教、道徳、制度、儀礼——を、局所的・協

² ここまででは "organization" の訳をゲシュタルト心理学の定訳に倣い「体制」としてきたが、以降は社会学の語彙に合わせて「組織」と訳す。このような読み替えもまた「意図的な誤読」の手続きのひとつとして捉えてよいだろう。

調的に目撃可能な何らかのやり方で素人・玄人の別なく社会学を実践する成員によって「活動内生的かつ自生的」(Garfinkel 2002, 190, 245)に達成されていると考えることである。

3-2. 「意図的な誤読」の基本方針(2): 二元論的前提の意図的な誤読

もう一つの基本方針は、ガーフィンケルが言うところの「世界的な社会科学運動」、すなわちパーソンズに代表される形式的分析を行う研究者のアプローチを問い直すために、グールヴィッチによる知覚の二段階仮説を問い直すという議論の構成を応用するということである。

ガーフィンケルは、「第二次世界大戦後の社会科学での要請に応えるために、これら [=グールヴィッチの意図的な誤読は] は置き換えられたものである。その要請とは、組織的現象の一般理論化を、実際の現場で、専門分野固有の方法をはっきりと丁寧に記述した研究によって動機付けるということである。対象(objects)の一貫性の問題は、現場のものを使って解決されねばならなかった」(Garfinkel 2002, 258)と述べている。ここでの「置き換え」とは、ゲシュタルト心理学の知見を援用して現象学を基礎付けるグールヴィッチの試みの「考え方」の部分、当時の社会学的実践を再特定化するための資源として転用することだと読むべきであろう。

この要請の背景については、ガーフィンケル(2002, 94)がデュルケムの金言をエスノメソドロジカルに実践するためにまとめた5つのステップのうち、最初の2ステップの記述に見出すことができる。

1. 世界的な社会科学運動の社会科学における科学を定義する第一級の実践は「プレナムには秩序はない」という標準的方針に従って、社会的事実の具体性と分析可能性とを区別している。
2. これに反する大量の証拠が、デュルケム的ものの現象場の特性の無限の一貫性に見出される。これらはデュルケムが無視したものの現象場の特性である。

この「プレナムには秩序はない」という箇所には注がつけられており、そのスポークスマンがパーソンズであることが明言されている。ガーフィンケルによれば、パーソンズの主著である『社会的行為の構造』はデュルケムの金言である「社会的事実の客観的リアリティは社会学の基本原則である」という方針に完全に則ったものである。そして、すべての行為に「行為の具体性と分析的に提供される行為」の区別があるという(Garfinkel 1991, 12)。

「行為の具体性」とは、人びとの普通の生活における具体的な行為のことを指す。「分析的に提供される行為」とは、専門家による形式的分析によって人びとを外在的に拘束する秩序が発見されることを指す。このペアにおいては、前者は「秩序がない」として扱われる。それに対して、パーソンズは「社会秩序はいかにして可能か」という社会学の根本問題に取り組むために、形式的分析によって秩序を与える。こうした実践によってモデル化された社会は、パーソンズによって定式化された行為に満ちている空間となる。このようなペアにおいて秩序がないものとして扱われた空間をガーフィンケルは「パーソンズのプレナム」(Garfinkel 1991, 12)と呼んだ。

ここで留意が必要なのは、具体性と分析可能性を区別し、研究者自身のプレナムを必要とした

のはパーソンズだけではないとガーフィンケルは注意深く述べていることである。たとえば、ガーフィンケルはジェイムズもパーソンズと同様にプレナムを必要としたと述べる。「ウィリアム・ジェイムズの、花咲き乱れ、ざわめき混乱したプレナムは、知覚と注意のそれぞれ異なる特徴的な一般的性質を特定するために必要とされた」(Garfinkel 1991, 13) ということである。

グールヴィッチによれば、ジェイムズは、感覚的総体はカオスであるから、それに秩序を与える能動的な心の働きにより知覚が達成されるのだと考えた。一方、パーソンズは、人びとの具体的な行為はカオスであるから、分析的記述によって秩序を与える必要があるのだと考えた。両者が取り組んだ課題はまったく異なるけれども、「カオスな対象に、外的な働きかけによって秩序を与える」という点については共通しているのである。ガーフィンケルが注目したのはこの部分である。ガーフィンケルのみるところ、当時の社会科学の実践の多くがこうした見立てのもとでそれぞれのプレナムを必要としていた、ということなのである。「世界的な社会科学運動」という表現は、こうした傾向を示すために用いられている。

3-3. 「意図的な誤読」の基本方針（3）：顕著性概念の意図的な誤読

最後に、「顕著性」概念の意図的な誤読についても説明する。グールヴィッチによれば、先に触れたとおり、「あるデータ群が出現し、流れから分離するような顕著性は、流れに導入されるのではなく、流れそのものがもたらす特徴である」(Gurwitsch 1964[2010], 29)。このような全体から分離して出現する諸要素の内性的な一貫性を表現する用語として「顕著性」が採用されている。

ガーフィンケルは、このグールヴィッチの記述を引用したうえで、社会秩序の問題に取り組むために次のように「意図的に誤読」する (Garfinkel 2002, 281)。すなわち、行為者を取り巻く環境には人工物・自然物・人間・動物等々が存在し、また、さまざまな自然現象や行為が組織されている。そのようななかで行為者も何らかの行為を組織する。その自己組織化過程において、環境内の特定の要素がその都度レリヴァントになる。同時に、行為の組織にレリヴァントではない要素はすべて背景領域となる、ということである。

3-4. 「意図的な誤読」の手順

以上を踏まえ、ガーフィンケルによるグールヴィッチの「意図的な誤読」の手順を以下に要約的にまとめる。その手順は、グールヴィッチの議論（本論 2 章参照）を正確に理解したうえで、これまで 3 章で述べてきた読み替えの基本方針のもとで「意図的に誤読」という流れになる。以下はその具体的な手順をまとめたものである。グールヴィッチの議論を箇条書きで書き下したあとで、3 章で示した重要概念の読み替え方針のもと、ガーフィンケルによる「意図的な誤読」が必要な箇所には取り消し線を施した上で、置き換える文章をブラケット内に加筆した。

1. グールヴィッチの『意識の領野』第 2 部 1 章の「ゲシュタルト心理学のいくつかの原理」の議論を十分に理解せよ。特に注意深く理解すべき事項は以下のとおりである [そのうえで、次のように「意図的に誤読」せよ]。
2. 知覚の [社会秩序の] 問題に取り組んできた先達は、知覚の問題を [社会秩序の問題を]、カ

オスな感覺的總体〔具体的行為〕から特定の要素群が心の働きに〔分析的方法に〕よって抽出され秩序が与えられる条件を問うことだと措定していると理解せよ。

3. そのような感覺〔具体的行為〕と知覚〔分析的行為〕の二元論的前提は間違っている。個大の意識の〔人びとの行為の〕流れのなかでの自生的達成として特定のデータ群の〔社会秩序の〕顕著性が出現することから、知覚は〔社会秩序は〕自己組織化されていると考えるべきである。
4. そのとき、知覚対象の〔社会的事実の〕一貫性は、外部からの何らかの手続き（ex.知的作用〔形式的分析〕）によって与えられるのではなく、知覚の〔社会的秩序の〕組織化の流れのなかで生じ、また与えられるものとして理解せよ。³
5. 知覚された対象は〔社会的事実は〕、ゲシュタルトである。ゲシュタルトは〔社会的事実は〕各要素が相互依存的に取り結ぶ機能的意義〔機能的意味作用〕を与えるとともに、各要素間の相互依存的な機能的意義〔機能的意味作用〕は全体的なゲシュタルトの〔社会的事実の〕組織化に貢献する。このことから、ゲシュタルトと〔社会的事実と〕各要素は相互反映的⁴な関係にあるものと理解せよ。

ただし、ガーフィンケル（2021, 31）は、この「読み替え」に以下を追加すると述べている。

…もう一つのプロパティを追加します。それは、私が「データ群の証明的性質 (probativeness)」と呼ぶものです。証明的性質が意味するのは、最初から最後まで内生的で、スムーズで、中断されない、説明可能な連鎖としてそれ自体が最終的に利用可能だということです。

このようにガーフィンケルが述べるのは、ゲールヴィッチの取り組みは個人の意識における一瞬の知覚を取り扱っているために、時間の要素が希薄だからである。そこで、行為が組織され、ひとまとまりの活動が維持される文脈と時間的要素を加えねばならない、ということなのである。

以上の時間性の追加の含意は、2007年に公表されたガーフィンケルの講演録において、端的に説明されている。ガーフィンケル（2007, 28）は、ゲールヴィッチがゲシュタルト心理学における実験プログラムに忠実に議論を組み立てていたこと、すなわち線描画を見た経験をテキストによって説明していたことを指摘したうえで、実際に自分で本論でも先に触れたゲールヴィッチの「2つの点」に類似した図を黒板に描きながら、次のように述べていた。

3 ガーフィンケルは「方法の固有妥当性要請」と「エスノメソドロジー無関心」の2つのポリシーが「Gurwitsch (1964) による機能的意味作用とその特性についての知見を用いるものである。これらは、ゲールヴィッチの超越的現象学的研究と形式のゲシュタルト理論の再特定化の結果であった」（Garfinkel and Wieder 1992, 206）とも明言している。これについてガーフィンケルはこれ以上の説明をしていないが、これらのポリシーは、社会秩序の自生性というアイデアから導かれたと見ることができるだろう。

4 『エスノメソドロジー研究』では、アカウントおよびアカウントビリティの「相互反映的 (reflexive)」あるいは「受肉化する (incarnate)」特徴がエスノメソドロジーの核心をなすことが明記されている（Garfinkel 1967, 1）。従来の研究では、リフレクシビティ概念の由来は詳らかではなかったが、本論で示したように、それはゲールヴィッチを経由したゲシュタルト心理学の議論に由来する蓋然性が高いと言える。

そう、社会学者にとっては、それだけでは不十分でした。しかし、私がちょうどいま示したように、これらの奇妙な図を使用することで、対象の一貫性をはじめてから教えることができます。黒板に注がれる視線。それらを使って、次のように問うことができる。グールヴィッチが「機能的意味」と読んだそれらの性質について、その実証可能な性質をどのように検証すべきでしょうか？大きな問題は、つまり、ここに詳細 (detail) があるということなのです。

つまり、黒板に描かれた2つの点の意味は、それを見る者に対して、ガーフィンケルによる描写・説明という行為の順序立った組織に内生的かつ自生的に与えられる、ということなのである。

4. おわりに

本論の課題は、ガーフィンケルによるグールヴィッチの「意図的な誤読」の実践を明らかにすることだった。その作業として、グールヴィッチの議論の骨子をまとめたうえで、ガーフィンケルの著作に点在する「意図的な誤読」に関する記述を統合し、エスノメソドロロジーの綱領として『意識の領野』を読み替える方法を示した。それは、パーソンズに代表される「世界的な社会科学運動」を踏まえた上で、そこからエスノメソドロロジーを創造する方法であったことも確認した。

このような読み替えは、「形式的分析によるテキストとそれらのエスノメソドロロジー・オルタネイツ」(Garfinkel 1996, 12) のペアからエスノメソドロロジーの寄寓性を特徴づける後期ガーフィンケルの議論とも符合することを最後に付け加えておく。エスノメソドロロジーは諸学問の形式的分析に対する対抗的側面ばかり強調されてきたきらいがある。しかし、むしろその寄寓性にこそエスノメソドロロジーの社会学としての特徴がある。形式的分析はガーフィンケルがエスノメソドロロジーを創造するための出発点であると同時に、エスノメソドロロジー研究を実践するための最初の手がかりなのである。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 21K01901 の助成を受けたものです。

本論の執筆にあたり、社会言語研究会 (sola) と関西人文学互助会の皆様から大変有益なコメントをいただきました。記して感謝いたします。

【参考文献】

Durkheim, É., (1895), *Les règles de la méthode sociologique*. (=1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店) .

Eisenmann, C and Lynch, M., (2021), "Introduction to Harold Garfinkel's Ethnomethodological Misreading of Aron Gurwitsch on the Phenomenal Field", *Human Studies*, vol. 44, no. 1, pp. 1-17.

Garfinkel, H and Wieder, D L., (1992), "Two incommensurable, asymmetrically alternate technologies of social analysis", In Graham Watson, Robert M. Seiler, eds. *Text in Context:*

- Contributions to Ethnomethodology*, Sage Publications, pp. 175–206.
- Garfinkel, H., (1967), *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Garfinkel, H., (1991), "Respecification: evidence for locally produced, naturally accountable phenomena of order*, logic, reason, meaning, method, etc. in and as of the essential haecceity of immortal ordinary society (I): an announcement of studies", In Graham Button, ed. *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press, pp. 10–19.
- Garfinkel, H., (1996), "Ethnomethodology's Program", *Social Psychology Quarterly*. Vol. 59, no. 1, pp. 5–21.
- Garfinkel, H., (2002), *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*, Rowman & Littlefield.
- Garfinkel, H., (2007), "Four relations between literatures of the social scientific movement and their specific ethnomethodological alternates", In Stephen Hester, David Francis, eds. *Orders of Ordinary Action: Respecifying Sociological Knowledge*, Ashgate, pp. 13–29.
- Garfinkel, H., (2021), "Ethnomethodological Misreading of Aron Gurwitsch on the Phenomenal Field", *Human Studies*, vol. 44, no. 1, pp. 19–42.
- Garfinkel, H., (2022), *Harold Garfinkel: Studies of Work in the Sciences*, New York, Routledge.
- Gurwitsch, A., (1964[2010]), Richard M. Zaner and Lester Embree, (eds.), *The Collected Works of Aron Gurwitsch (1901-1973): Volume III*, Springer. (The Field of Consciousness, 1-409)
- Hutchinson, P., (2022), "Wittgensteinian Ethnomethodology (1): Gurwitsch, Garfinkel, and Wittgenstein and the Meaning of Praxeological Gestalts", *Philosophia Scientiæ*, vol. 26, no. 3, pp. 61–93.
- Köhler, W., (1929), *Gestalt psychology, an introduction to new concepts in modern psychology*. Liveright. (=1934, 佐久間鼎訳『ゲシュタルト心理学』内田老鶴圃) .
- Lynch, M and Eisenmann, C., (2022), "Transposing Gestalt Phenomena from Visual Fields to Practical and Interactional Work: Garfinkel's and Sacks' Social Praxeology", *Philosophia Scientiæ*, vol. 26, no. 3, pp. 95–122.
- Lynch, M., (1993), *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press. (=2012, 水川喜文・中村和生監訳『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房) .
- Meyer, C., (2022), "The Phenomenological Foundations of Ethnomethodology's Conceptions of Sequentiality and Indexicality. Harold Garfinkel's References to Aron Gurwitsch's 'Field of Consciousness'", *Gesprächsforschung - Online-Zeitschrift zur verbalen Interaktion*, vol. 23, pp. 111-144.